

上代日本語の源流を探る

『長田夏樹論述集（下）』第30章

（原載：『別冊歴史読本：謎の歴史書『古事記』『日本書紀』』，1986年2月）

初出の時の副題は「一記紀・万葉を手がかりとして一」であった。本論文は比較言語学の立場から、日朝同系を主張し、両言語の類型的特徴の一致を挙げる。そして古代日本語、古代朝鮮語の音韻体系を明らかにするための資料を挙げ、「推古朝遺文」中の固有名詞に見える漢字音は百済系漢字音であり、『日本書紀』に見えるこれに共通する特徴を持つ借音仮名が百済史料に限られることを指摘。当時、この方面の研究を行う研究者にとってはナイーブな共通認識だったか。それとも先生独自の調査結果に基づくものか。本論文に言及は無いが、この点は木下礼仁氏の「『日本書紀』に見える「百済史料」の史料的価値について」（『朝鮮学報』第21・22輯合併号，1961）で始めて網羅的な調査結果が報告されたと評者は認識する。

古代のサ行音は中央方言では[ts]、筑紫方言は[s]であり、邪馬台国のサ行音は[s]であるから、邪馬台国畿内説は成り立たないという主張は独創的である。この主張は既に「倭人の言語とその展開」（『著作集』（下）第21章）で提示されている。目立った反響無く現在に至っているのが惜まれる。

最終節では「倭人」に関する中国史料を博搜し、壮大な仮説を提示。中国東北地方南部で日朝祖語が日本語と朝鮮語に分かれた。当時の日本語にはサ行の発音の違いに基づき、[s]部族、[ts]部族、[tʃ]部族の三方言があった。そして[s]部族は九州に、[ts]部族は畿内に、[tʃ]部族は東北に移り住んだと主張する。p.696に挙げる[ts]部族のサ行代表字に摩擦音声母字「輸、素、珥、儒、筮、茹」が混じり、[s]部族のサ行代表字には破擦音声母字「志、曾、自」が混じっており、日本語の推定音価と乖離するところがある。詳しい説明は「倭人の言語とその展開—日朝両語同系論の立場から—」（『著作集（下）』第21章）もしくは「日本語の形成」（『著作集（下）』第23章）を参照されたい。（太田斎）